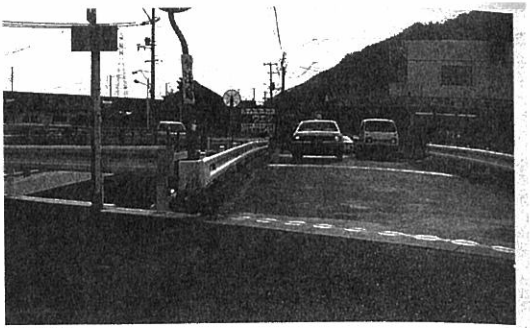
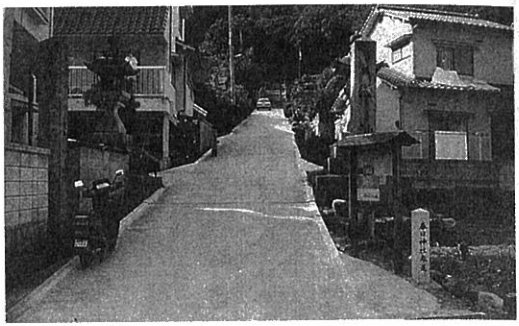
観音免のクスノキ


砂走橋

荒神社の常夜燈


春日神社参道

（二）道筋と現状

1　海田から船越まで

〔海田〕

瀬野川と海田の境、畑賀川にかかる砂走橋、現在はコンクリート橋となっているが、かつては十間程の土橋であった。この橋を渡ると旧奥海田村に入る。しばらく行くと右手に春日神社の参道入口に立派な常夜燈が二対（文化七年）、もうひとつが道路の左手にあり、それには文政八年とある。

「文化度国都志」に「行程標的」として「当村氏神春日社麓見当ニ仕候義ニ御座候」とあるのは西国街道の傍らにあるこの神社が、旅人の目印のような役割を果たしていることを物語っている。

春日神社に隣接する日浦山の南東山麓部には、七世紀前半から中頃にかけての豪族の墓といわれる畝観音免第一号および第二号古墳がある。これらの古墳は観音免公園の中に整備保存されている。なお、公園内には県の天然記念物（昭和五十年指定）である樹高約三〇メートル、根廻りの周囲五・八メートルの「観音免のクスノキ」が人目をひく。

さらに行くと道路の右手に荒神社の小さな常夜燈がひとつポツンと据えられている。

海田町畝一丁目、同町石原との境界近く、海田市に向かって道路の左端に、地元の人が「名残の大名一本松」と呼び親しんでいた海田町に残る唯一の街道松があった。しかし、昭和六十一年十二月、枯死（マツクイムシ）して切り倒されてしまった。樹齢は約三〇〇年、周囲は二・四メートルあったといわれる。現在、その痕跡はまったくないが、松があったところの道路部分が内側に湾曲しており、そのことがうかがわれる。

なお、第二次大戦前まではその近くに街道松が五、六本あったといわれる。

瀬野川にかかる日下橋を渡り、国道二号線を横断して右手の蟹原浄水

古い商家のつくり（海田市上市）

海田市市頭

場あたりは海田市の前身、中世（南北朝時代）の港津集落である二日市が栄えていたところである。ここは寛文元年（一六六一）に瀬野川の流路を変更する以前、西国往還と南側瀬野川河口にはさまれる水陸交通の接点であり、毎年三月二日に貝類取引の市が立っていた（「国郡志下調書出帳」）。

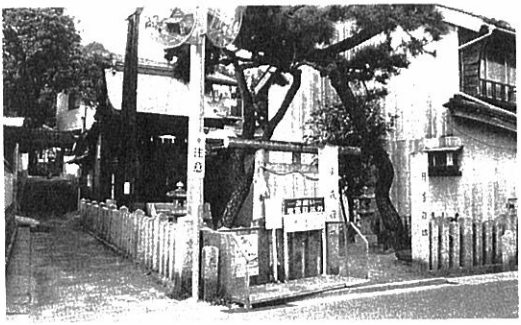
「道ゆきぶり」を書いた九州探題今川了俊が、応安四年（一三七一）海田浦で逗留した場所がこの辺りと推定されている。瀬野川の河口は、当時この辺りであった。海岸線にはここから東側へ蟹原・浜・磯田辺りへと干潟が続き、北側日浦山山麓の石原・畝にはすでに民家が存在していた。

二日市と瀬野川をへだてた西隣に県内最大級の厚さをもつ中世の石原常本貝塚がある。ここから土師質土器・陶磁器の破片のほか五輪塔の笠（火輪部）まで出土しており、室町時代前期の貝塚と推定される。また、ここの南隣の脇之内からは中世に流通した古銭が大量に発見されたこともあり（文化八年　一八一一）、人口が集中し商業活動も活発であったことが察せられる。しかしながら、二日市はその後、瀬野川の流路変更と新開の築調によって衰え、その機能はしだいに海田市に移っていった。

海田市は、大阪と下関とを結ぶ西国街道の宿駅のひとつである。海田市の市頭、ここは宿場町である海田市の東の端にあたり、この付近から町家作りの住居や切妻造りの屋根が目立ちはじめる。家の建て方に注目すると、敷居の線が道に平行でなく片方が道路にせり出している。このような建て方は宿場町の特徴であり、大名行列が見えなくなるまで土下座を強いられた庶民の知恵とされる。

このような道路形態はここ以外に海田町に三か所、船越にも一か所残る。大名行列に粗相をして打ち首となったわが子の敵討ちをするといった「鉄砲うち」の話や、飛脚とけんかをして打ち首となった若者の話が残るのも、宿駅である海田市ならではの特色である。

海田市の成立は城下町広島の開府と同じ天正年間（一五七三～九二）で、



恵美須社

熊野神社

当初、東海田から船越へ通ずる道は、背後の山手にある古い道であった。「海田旧記」には、「当村の山手に古しへの灘道」があり、熊野神社の前身ともいうべき小祠や、明顕寺の前身である小さい阿弥陀堂が、その西国街道以前の主要道としての灘道に沿って存在していたことを伝えている。今もこの道は部分的には残っている。寛永十四年（一六三七）のころには、上市・中市・下市の町筋とそれから町裏に抜ける小路が整然とできており、それはほぼ現在の町並みと一致している。

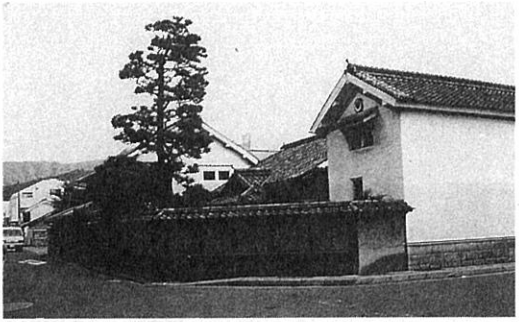
菱屋平七は『筑紫紀行』享和二年（一八〇二）に「浜手を廻れは海田市宿広島より是まで二里、人家八百軒計、大形瓦葺きにて宿屋茶屋商家多し」とそのにぎわいを記している。

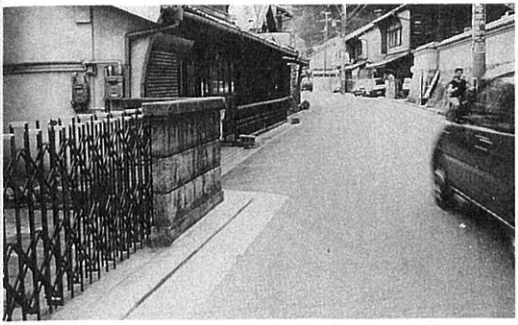
西国街道はこの辺り、現在の県道瀬野・船越線であり、上市に入ると、左手に古い商家がある。この家は阿曽沼家といい、古くから雑貨と塩の販売を行っていた旧家で、商家の基本的な造りが今に残っている。この商家の造りは屋根が低く、二階はあるが天井が低く物置になっているのが特色である。

しばらく行くと右手に海田市の氏神熊野神社の鳥居が見える。この熊野神社が勧進されたとする紀州熊野神社との系統の由来は不明であるが、古来社名は「新宮」といい、海田市の発展に応じて氏神として地元有力者の寄進により整備されてきた。明治六年、社名を熊野神社と改称した。

その西隣が御茶屋跡である。この茶屋は寛永十年（一六三三）の幕府巡見使に備えて設置されたものであるが、その後はそのまま本陣として転用された。この時領内で設置されたお茶屋は二五か所にのぼり多くはしだいに廃されたが、ここは本陣の役割を果たすかたちで存続したのである。

御茶屋跡の西の端に中店恵美須社がある。その前の小路から中店大橋を渡って新開を南下し、矢野に続く直線状の道がある。これがかつて「矢野大道」と呼ばれ、旧呉国道となった道である。御茶屋の他に準公的な


千葉家屋敷


海田市新町

海田市の一里塚跡

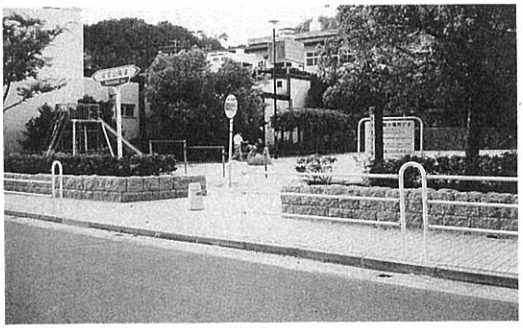
宿泊施設として脇本陣があるが、海田市では庄屋猫屋新太郎の家が指定され、屋敷の中には倉が七つあった。現在は海田市公民館がある。

ここには大正九年に、呉より移された安芸郡役所が置かれ、その公民館から一五〇メートル余り歩くと、同じ道路の左手に高い松の木のある大きな屋敷がある。これが江戸時代、「天下送りの役」を勤め、そして正保元年（一六四四）以降は上級武士の宿泊も引き受け、脇本陣的役割りを果していた千葉家屋敷である。「天下送り役」とは、幕府の書状や荷物を継ぎ送ることで、広島藩特有の呼称である。その屋敷構えは、東側に格子を組んだ主家があり、商家（古くは酒造業）の造りを示しているが、西側に別の腕木門を設け、小庭をへて上級武士を迎えるための千鳥破風入母家造りの玄関構えをしつらえている。古くは大きな式台もあったようである。そこを入ると、欄間・襖で仕切られた数寄屋風書院造の部屋が続き、床と付書院を設けた本座敷からは手入れの行き届いた庭が眺められる。この屋敷が建築されたのは、当家に寛政元年の絵馬が伝えられており、十八世紀にさかのぼることは確実である。

中店を過ぎると稲荷町。ここはかつて下市と呼ばれたところ。左手に大きな商家風の建物、三宅本家がある。建築年代は不明であるが、江戸時代の商家のおもかげをよくのこしている。

さらに行くと海田市の西端、新町となる。稲荷町と新町との境の右手の道端にまだ新しい御影石の石碑、「海田一里塚跡」がある。この一里塚は寛永十年（一六三三）の幕府巡検使の巡察のとき設置されたものと思われる。古塚は大正十年に一里塚松とともに撤去された。その松の一部は今も近所の人が保存している。その後、塚跡を示す木製の碑が建てられていたが、この石碑を昭和五十六年に新しく設置したものである。

新町は浅野藩が宝暦年間に漁業者を集住させたところ、彼らの多くは江戸期の海田の名産であった牡蠣養殖に従事した。その当時は新町屋敷といわれた。



代官所跡

大歳神社の道塚

カギ型の道路

〔船越〕

海田町に接する船越町側の小字を花都という。「ハナ」は「端」・「岬」の意であり、「ト」は日浦山の南端が海に突き出ていた所から生まれた地名ではないかといわれる。

花都川を少しさかのぼると竹浦がある。かつて山陽道は山沿いのこのあたりを通っており、宿に困った旅人が宿めてもらったその御礼に残したという「竹浦の鬼面」の話はそのことを物語る。

この道は大歳神社の手前で左に折れるが、曲がらず花都川に沿って行く道は船越中学校の前を通り、畑賀の為角（ためずみ）につながる古い道である。

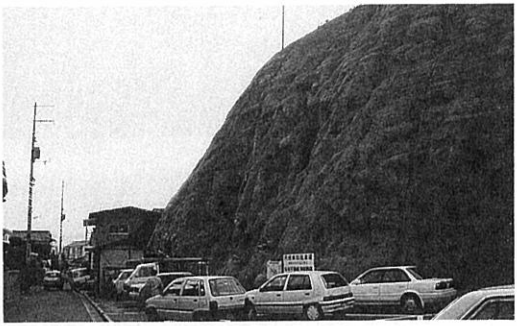
大歳神社の入口には明治の初めころの道塚がある（明治八年建之とある）。大歳神社の前の小路を南に下ると、また県道府中・海田線にでる。右に曲がり、しばらく行くと右手に安芸区中央児童公園がある。ここはかつて代官所があったといわれるところである。その道を隔てた向かい側に、少なくとも終戦直後まで、五本くらいの街道松があったという。今はまったくその痕跡はない。さらに行くと恵比寿神社の先で道路がカギ型に曲がっている。これは海田市のところで述べたように道に対して家の敷居が斜めに突き出す形で立てられたものと同じ理由による。現在は、自動車交通のネックとなっている。

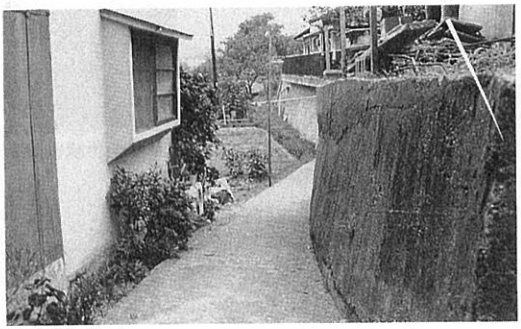
この辺りは木船と呼ばれ、古くは「着船」とも書かれ、その昔、菅原道真が西遷の際、船が着けられたところという。このカギ型の道路を右に折れれば、かなりの急坂となる。この坂道は市場坂といい、城山（市場山城）と下古屋山との間の峠道である。

正徳・享保のころ（十八世紀初頭）まではこの道が街道であった。

ただし、潮干潟になった時は、南側の松石鼻という所から「下道にかかりて、磯づたいに行く、これは下道にはあらねど、行きかよふ人多く岸高にて、波巌を砕き、おのづからなるほら穴などあきておもしろき道

市場坂


松石鼻


市場坂からの古い西国街道

路なり」と「浜ちどりの記」に記されている道筋をとっていた。この辺りは引地と呼ばれる。引地とは「潮が引く地」の意味であり、付近一帯は漁師の網引場であったともいわれる。

この下道が正式の西国街道となったのは、この南にひろがる松石新開築調後（文化五年、一八〇八）であったと思われる。現在の松石鼻、崖の部分には全面にセメントがふきつけられ、その当時の風情はない。

市場坂の峠から右手の方向に一本の道が尾根づたいに続く。しばらく登ると石造りの大鳥居が見える。船越の氏神、岩滝神社である。岩滝山の中腹に位置するこの神社は、貞享二年（一六八五）、花都の八幡宮、畔地の新宮、西の祇園社を合祀したものと伝えられる（「国郡志下調書出帳」）。明治六年（一八七三）に改称し、現在に至っている。神社を中心に裏山も含め公園として整備されており、裏山を少し登ると瀬戸内海を見下ろす眺望はすばらしい。

市場坂の峠を越えて少し下ると右手に民家と民家の間の幅およそ一メートルほどの小路が続く。付近の古老がかつての街道であったというので、しばらく進んでみるが、行き止まりとなる。この道はかつて稲荷神社の前までつながっており、その先からの道は現在も残っている。正専寺の横にある庚申神社の前を通り細田の手前で県道府中・海田線と合流する。庚申神社の鳥居の脇に大きな銀杏の木がある。宝永三年（一七〇六）の船越村絵図にある街道脇の「大木」がこれにあたるのではないかと橋本正夫氏は推測する。とするならば、西国街道は当時、この経路をとっていたことになる。

さて、もとに帰り、市場坂を反対方向に下る。かつての下道と再び合流する。その合流点にあるウエノ洋品店の隣には岩滝神社があり、そこには高さ五メートルくらいの立派な常夜燈が一基ある。近所の人は「八幡さんの常夜燈」とよぶ。明治五年に設置されたものであり、「西氏子中」と台座にある。この市場坂は岩滝神社の参道でもある。

岩滝神社の常夜燈

庚申神社の銀杏の大木

このあたりを荷場という。荷揚場すなわち魚の置き場があったところの意と考えられる。荷場付近から道はやや登りとなり、小さな橋を通る。この橋を鼓橋という。この橋は元は花崗岩でつくられた橋で、それまでの山陽道が山の中腹をとおっていたのを平地に変えた時、畑賀・海田・中野方面の人々が船越の峠を越えて広島へ出るとき、大変役に立ったといわれ、この橋をかけた寺尾友次氏の功績碑が岩滝神社のすぐ北西寄りにある。今は川（鳥居川）が暗渠となっているため橋自体は見えず、石標も撤去されている。

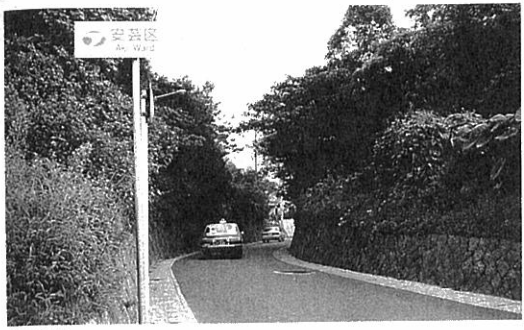
鼓橋からおよそ五〇メートル、道路の左端にかつて街道松があった。少なくとも昭和四十八年頃までは二本残っており、六十年ぐらい前には五本あったという。道は緩やかな登りとなって続いており、両側には古い民家が軒を連ねている。この辺りの道幅はやや狭くなっており、朝夕のラッシュ時には車の渋滞がひどいところでもある。

的場橋を渡ると三叉路となり、広いほうの道は大きく右に曲がっており、船越峠へとつづく。この峠は「新だお」と呼ばれ、明治二十年以降つくられたようである。それまでの道は北へ直進する狭い道であった。「新だお」ができてからは「古だお」と呼ばれるようになる。

「新だお」が建設されたのは、今の小請田の鉢山付近に、陸軍の演習場（砲兵隊）があり、そのために必要であったからであろう。現在は柳ケ丘団地が造成され、「古だお」への道は途中で消え、その位置も定かではない。

寛政五年（一七九三）頃の記録では、船越峠付近は淋しいところであったらしく、夜更けに広島城下から帰る海田方面の人達の中には、広島から護衛の人を雇って送ってもらったという例もある。新しい峠は標高三七メートル。府中町との境界でもあり、現在車の往来は結構多い。

峠を越え、坂を下りきると広く新しい道となる。これが県道府中・海田線である。この道路は新幹線の高架下を通る片側二車線の広い道路で



船越峠

鼓橋

府中大橋

「古だお」への道

ある。旧道は、ところどころでこの広い直線的な道路と別れてはまた一緒になる、というかたちで続く。スパーク浜田店のところで新幹線の高架下を通るとすぐに二つに分かれる。右の道が古く、左は比較的新しい。左の道路が整備されたのはおそらく大須新開の土手が完成した万治三年（一六六〇）ころのことと思われる。正徳・享保期（一七一一～一七三五）の「芸備諸郡駅所市町絵図（城東・巻六）」の付記によると、「当郡船越村大往還通行にハ此の市（出張市のこと）ハ通ラス、（中略）第一往還橋ヨリ矢賀鼻へ出ル、是大往還也」とある。

この道を行き府中大川に出ると、府中大橋がある。昭和五十二年にかけ替え工事を完了したコンクリート造りのこの橋を、地元の人は「府中の土橋」ともいう。この呼び名のいわれについて「芸州府中荘誌」（昭和五年）に「大正十五年までは府中大川、榎川、八幡川と経免新開の流、何れも水位を異にせる為、河中土手を設け、河中四川ありといふ有様、随って、此の橋も四切れとなってあったが、同年九月十一日未曾有の大洪水被害に橋は落ち水路は荒れ、之が大修復の序でに四川を合して一つとし八幡川の下流を埋立地とし、之に架けられたものである。此の橋、元定りたる名なく、土橋といひ、大かん橋といひ、茂陰橋など人々と異なり呼んでいたが、改築と同時に府中大橋と命名」とある。

この橋を渡ると道路は直線状となり、矢賀岩鼻を経て広島市街に向かう。なお、天保年間（一八三〇～一八四四）の古図面（「芸州府中荘誌」所収）には、今の「キリン通り」の入口あたりに一里塚松の記載がある。

（和田　文雄）